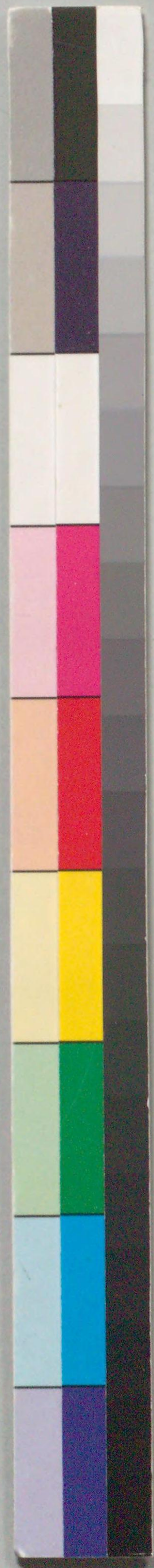




1001
4

石城志
六





石城志卷之六

歳時考目錄

正月二十五條

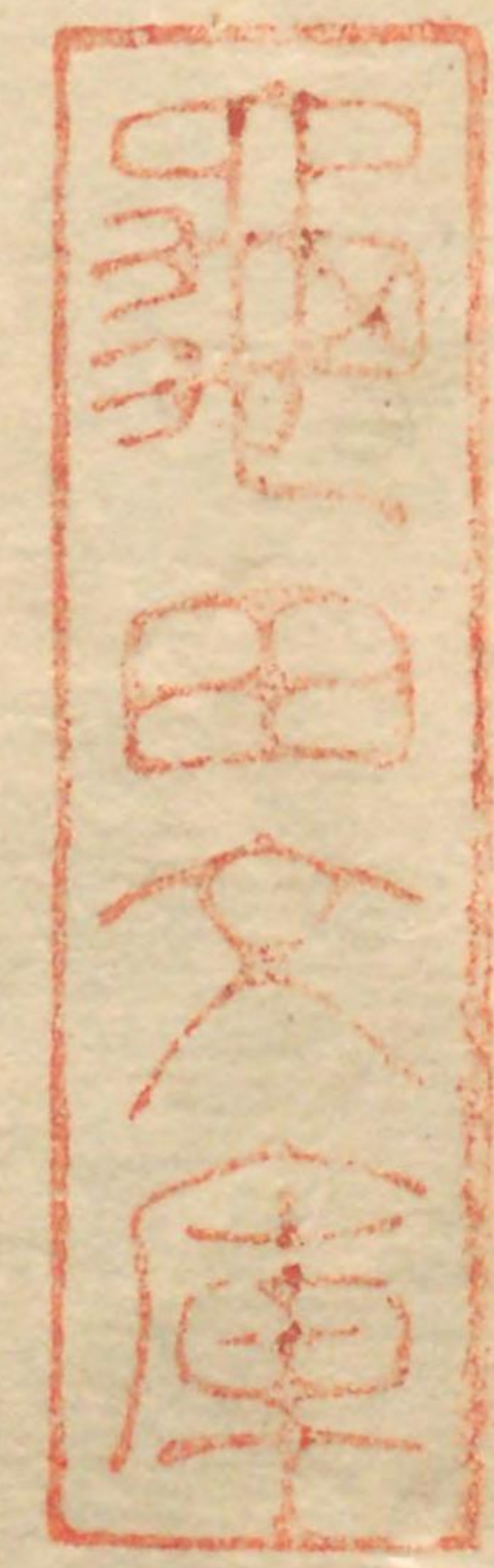
二月四條

三月三條

四月二條

五月一條

六月十三條



七月八條

八月三條

九月三條

十月二條

十一月五條

十二月五條

石城志天巻之六

石城志天巻之六

津田之顔校定

男 之貫編録

歳時



此巻はあまの玉の年々あらはるる三万冬

の終りまはるる河内守中乃りてあまの玉

せしりて行はるる歳時此編のありの事

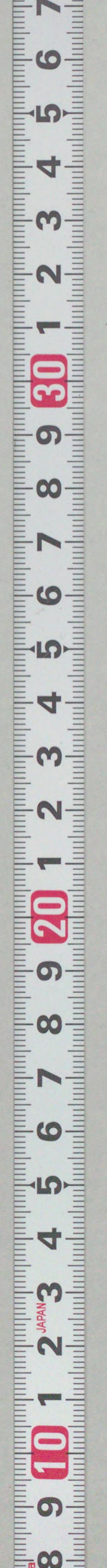
中あまの玉の事なり又土の國の事なり



如きふれ乃總武ふ若かへそいひしに記さる
しはるき年中乃佳公舞かきこ又北多のそふ
あふも能るの風俗や一と也國ふかふ
さるしあふしあふしはあふしあふしはあふし
おふしあふしあふしあふしあふしあふし
さふしあふしあふしあふしあふしあふし
今終るるあふしあふしあふしあふし

二月元日

博多の谷へ合福こもりて風より三谷内部
からしこのうそ物の観念のあふしあふし
日休のあふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふしあふし



博多の特産物といふ 丸餅 しろこ ちりめ

椎のちりめ しろい 里のちりめ 牛のちりめ

大根 干鰯 鯉 多礼味等の用

桜の飯 しろの大さや しろの飯 しろの飯 しろの飯

かきもの 飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

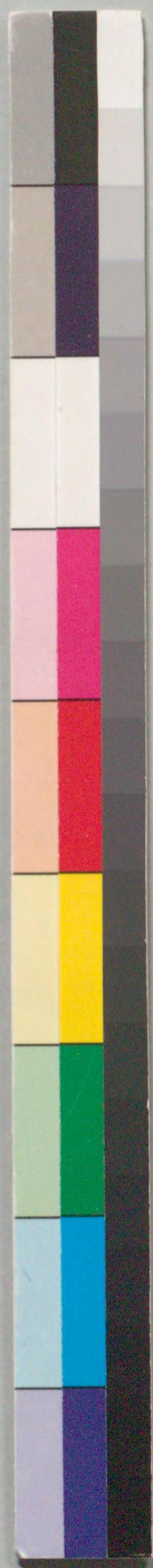
しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯

しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯 しろの飯



と銀さし〜

二〇

此日津中の人々一の年礼は来りて○持家あり
同ー又此日持家より用ひたるもの○高知
船も始り外家業のり〜のあり○大官も
さる及し年りり用ひる四人且外は持人
國々の兵船も出りて〜のあり〜
年々同く乃年々〜と出る津中より銀さる

是より後上り

は来りて金さるは是れなり
銀さるかまう〜三程二寄り〜

三〇

此より持家より同ー房後内と〜
三〇持家より津の席り来りて大親家の〜
乃出候は津中より〇玉さる〜
取前呼子浦乃高知持多〜
〜の玉さる海上〜ひろひ〜
持多乃河屋より〜

今梅小徳三乃高知河野馬屋
年々産ひる産初産を



七の河産の玉
之と云余の石評

三ツの玉の河産中ありありの玉は家伝の玉なり

疑ふまゝありて追ふ可也
富田の玉は行社伝に云く多
なる玉は行社伝に云く多

以井の玉は行社伝に云く多
一ツの玉は行社伝に云く多

社伝の玉は行社伝に云く多
二月三日の玉は行社伝に云く多

式の玉は行社伝に云く多
前山一の玉は行社伝に云く多

大かたの玉は行社伝に云く多
是の玉は行社伝に云く多

長かたの玉は行社伝に云く多
是の玉は行社伝に云く多

はげの玉は行社伝に云く多
神内上の玉は行社伝に云く多

中かたの玉は行社伝に云く多
二ツの玉は行社伝に云く多

是の玉は行社伝に云く多
河産中の玉は行社伝に云く多

行かたの玉は行社伝に云く多
此の玉は行社伝に云く多

絶つる玉は行社伝に云く多
富田の玉は行社伝に云く多

是の玉は行社伝に云く多
是の玉は行社伝に云く多

又持岸の玉は行社伝に云く多
是の玉は行社伝に云く多

乃神の玉は行社伝に云く多
又此の玉は行社伝に云く多



うら群々わや一化まる玉あふらさるる
すめりきま玉の神もあまのりとの
か

續風土記云二月三日玉の祭とあり
那珂郡東

聖初村の玉田のさあつさあつ
神鈴なりぬ玉を祭り科なり

祭乃中娘のそそ妻社のあまの木の珠のそそ

余がむらあつらるる村のさあつさあつ

そそ一はあつらるる本社の拜殿よそ

道まのそそあつらるる村

其年田穀のかりの豊饒かり

若しあつらるる
あつらるる
あつらるる

田

唐はのそ礼はらるる又福

神ははらるるのそ

五

此の玉福まらるる

十五の爆竹ハチマキは月一又二月の日の三つにり
分の親さふ等一梅は今宵は太宰守府より往
古より追儻のりゆり博多のさめよかよ

二日

梅田社より主東長寺大般天轉讓あり又此の
一の寺はたゞ聖福寺中の他優美なるものす
〜のありりり比よりさすもやま店

十日

此の門の松は〜は連綿の餘りさめりりハ
十五の止むき又高きもの〜松原と宗
福寺の信あり國のま比は社より福を又教養
びに拜借するものあり一文はも書自珍文の取
書自と福を〜年乃りあま〜と右の終り
信の利は四下と細きまの商神と福を〜の
るは行ふが〜也年此のま福乃群集さす
一社人表神在郡南里村のま原出雲又松

この書は後述の如く石城の町にあり

とあるが本誌に於ては

十一

此の町は河内と云ふ酒造の町なり

後述の如く

十二

松本一の福祿壽大黒の町なり

流り町に於ては此の町に引込の町あり又

乃に此の町あり

十三

此の町は春と云ふ酒造の町なり

本誌に於ては此の町に引込の町あり

又此の町に引込の町あり

又此の町に引込の町あり

又此の町に引込の町あり

又此の町に引込の町あり

十日

今め赤山と駕たのり同ー又爆中分禁たのり同

あ

此の松をー十歳ころの男乃三を天冠の

戴のを三巻衣はると小さなる假洞サスギの車は白福

乃成りしより此言の程おびり多し三巻のり

節以方被すなり猿ハシの事とーとさるなりとハシ

中より引ぬびゆひ本銘のり唐河のり土着

并小一束第一本を以ゆひ此何し年のり土着

ゆり。空た及ひはな人中別し年のり日正例

乃る。不信を三才のりその土着ゆひ銘ゆ出

あ教上の土着は有るは物土行程まぬり入るは二の土着は
引く二は三の土着二巻のり有る細四の土着は引く三巻の
土着は三巻のり有るは物ゆひ中なる同ー此何たすは接
あり同すりしは谷中と對し日正例をさるる同し交すは
海は

思のるるーめさるはたねの切は遠ひるるのー

銀世宗洞肥長小下りしはるる同し三巻のり有るは博

素面とあり一故を食りき若くいへてと妻比給り
 かかりの取らぬやうに食ひ備へ習ひのまきりそ
 ぬ苗馬の人のいりうきり思ひいへて終り
 一丹皇とく人かろし一宝曆十二年壬午の二月廿
 河田乃苗馬かろしとの権御一石室町尻十一町
 お後一有司の人よりいふ事のへきし一是行
 此世より福岡なる河田乃郎工作田文の取ひ一と妻
 比給は信陽の假面かろしとの鳥帽子ぬ長不らり
 中皇よりきり新くお別れ一故福祿壽大黒
 一町一員氏に備へて一と食のまき
 一かろしに給る一此向の田奉り時枝長と妻森
 源又之中間田年三子草屋善と信徳以善屋
 長と二草屋久と善と
 三福神のまき一言まき人の守りひはるる一河田
 古風のまき一廿のまき一十年のまき一今一かろ
 一まき一文向一まき一のまき一とまき一とまき一

へ入る山はくわく唐の仙鳥翁浦山とて蓬
業の方丈廬州とて三の山とて今西本の
木に何くても十年経ても松乃木乃十年さるのゆ樟乃
木に唐天竺の木がまはると下は観音世至の石まひ
るのつりまかんしぬ崎とて千代川とて一とて
と袋中とてごうとて袋のえま大正のまると
めとて一西のたつ浦とてめとて乃田とて
↑五尺の大雲
五尺の大雲のつりまかんしぬ崎とて一とて

けり口きつ浦三重の浦動き世海の十二万葉の天降
るにゆひとて大正三十三人小正三十三人目
録帳とて一とてあつた三年三月九十日月日の
日刻乃山とて一とて化つた乃ひくは船かきとて
るか梵字とて一とて天皇^{二軍}屋瓦とて十二の
綱とて一とて今船とて一とて船とて一とて船とて
かん^一船の浦とて一とてあつたのの世の
むとるの^イ船とて一とて川の^イ船とて一とて

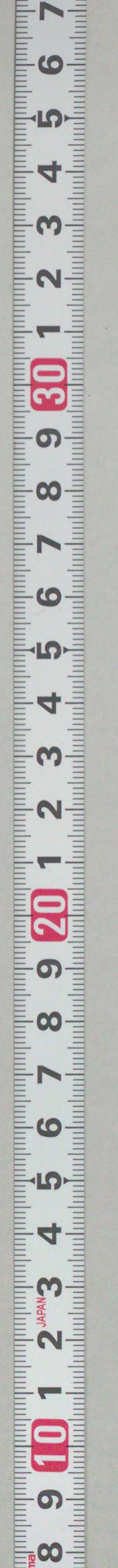
出て思ひ勝つ所のより一葉方の中夢をくもる
 といふさる世乃大入匠シラバと別がやや別がや
 可く細のさる世乃大入匠の持るる宝の隠し表
イサカ
 此のまぢりの中植まざるまぢりイサカ
イサカ
 山々すものまぢり谷のまぢり谷のまぢり
 梓麻耳の長コウサキの川コウサキのまぢり右の鯉と鯉
 とはぬまイサカの海イサカのまぢり右の鯉のまぢり
イサカ
 貝のまぢりイサカ
 ぬまイサカのまぢりイサカ
 石思イサカのまぢりイサカ
 積イサカのまぢりイサカ
 南イサカのまぢりイサカ
 一イサカのまぢりイサカ
 三イサカのまぢりイサカ
 三石二十三イサカ把イサカのまぢりイサカ

大國 須磨屋

物至觀言の挽言と地を弄る舟の影は月と
うらみ挽とく挽よ今の挽はかう言ふとく言ふとく
びとかりけりし通りの海よのうらみ挽よ

此の津舟の三皇男女は綾羅絳繡の衣服はとく感
王侯士庶の姿はよかひ或は遊天介の遊子の粧の
お仕立船がとくはゆるし遊言の体はかゝり又お小き
殿サシガ舟車ははすやあやけくまを結せしゆり
かゝりし年々もやとく言ふのしりし有衣アヒサシ夜行は

名一とけは八甲古穀征三味線かゝりし
三三やびりしるん戯言ははたかよ乃人しりし
とくうらち通るさぬいし鳥あるヒナ観ヒナかゝりし
代もやし例かきりさかまは國中ナカはさかこ遠山は
遊文をまうとくその巷街ナカはさかまう 國君
は銘の前サキは松とくはさかまそのしりし一納ん
まうははらぬまかた店へカインゲ控コウ若士カワラケはさかま出
とくはさかまはさかまうべんしりし三観ミツひ集りし



柄杓は打出さる推きかゝる今もこのいふ

の長中申す到り河を感はるるの事

も佳し河の河研は及ひぬその道路

倒れ計前後はごよきよぬあつても河

太平乃代の事——いふてゐる——

松とて乃巡^{シヤウ}錫^{シヤウ}はるぬ人王に代 高倉後

五元之年小松乃府二千三益云本州宗係方

日也國の事の子許又忠左の典といふこと

使——と金三の事也後世進福のもの太宗

國音王山花入てゐる。

平も物語云ふその春乃は鑑西より妙てん

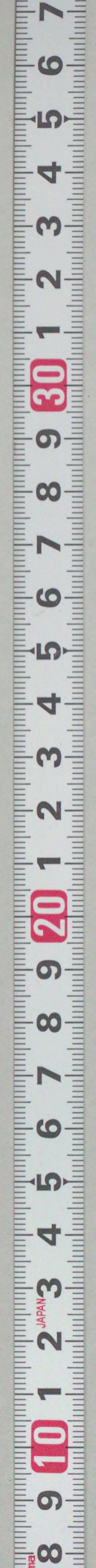
いふ船はなるとて人ぬるものなり對面

あり金三の五つあるゆ——よとてはのりゆ大正

乃若かまはると五つあるゆはぬる三つ

ぬる物なぬ——いふもぬるまじの傍より

いふぬる三つなるとて田代はとて



今梅小本州小松の領地から一故や宮崎の
 内中へ小松繩のよきものあり今いあやするごと
 せん繩のよきものあり地心松原の石仏及び
 三原の社内へあり彌尾繩のよきものあり
 ようく建久九年の叙宋國よりさへ返り
 小寺より既小段落へ一原成一統のせとかり
 聞て宋使二物とて小松並繩トモツ分給て歸國
 してしるすこと
三原此の曲ありしは三原三年今三原
 曆十三年の事とて五百年の事とてしるす

色小松とてのよきものあり博多トモツに遺るは博多
 乃此の妙也久重のよきもの今も持たるる小
 此時今も七福神の像は續きとて居るは
 此後之の礼状とて此尚博多記ありしりあは
 独りよき化
 今も一書状あるは今三原のよき
 書は持一人ありとて之を御所へ左の文を
 かくしり思ふは獨り日本の人ありとて
 首王山の仏照禪師使てかくしり居るは



昔お作のあやもあつたよと云ふは

まゝ金も世に得所より清く其のまゝ

七福神の説も又非く

其後天下よき事ありて

此の事終るべき事ありて

又商人中も徳りありて

大黒の仕立も河屋中も

又北原仲原の事ありて

後毎年お例の通り

招きよりて

故に

事ありて

と云ふ事ありて

殿を祀る事ありて

三福神

三福神



今此の如く報せしむるに、此の如きもの所を、

一人の老母ありて、此の如く、

解る人あり、

一説に、彼辰人、

松野

又中絶せり

今、此の如く、

忠之

乃、此の如く、

中絶せり

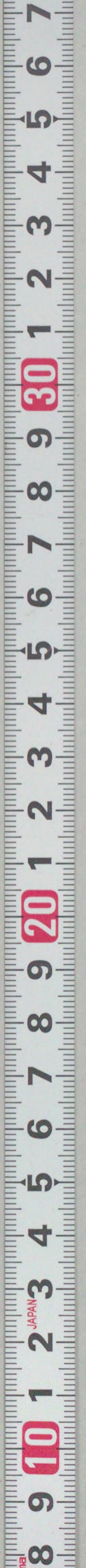
此の如く、

松野

此の如く、

此の如く、

此の如く、



壬午年二月十日廿五日再記松をや一紙一冊

福岡の長谷川屋と申す其後申す申す申す

福一と申す申す申す申す申す

申す申す申す
申す申す申す

伊豆と申す記は梅より比福屋ありまき

多くあり早生博多の者より石和あり一故松

と申す申す申す申す申す申す申す申す

後申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

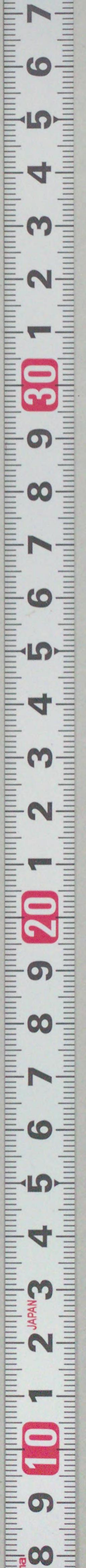
申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す申す申す申す申す申す申す申す

申す



此の三つ名持るゝ奴婿ハ宿^{ヤグ}居^{イリ}と^リ三人ハ一日の晦日

と^リ家^ノ中^ニ三^ツ所^リリ又母^ノ足^ヲ親^國ノ弱^キ又柳^ノ河^ノ

遊^ル女^ハ市^ニ三^ツ所^リ市^九日^ノ河^中ヤ^ズシ^ルハ^ハカ^キハ^ハ一

年^ノ中^ニ一^ツ所^リハ^ハカ^キハ^ハ一

十六日

十五日の赤小^ニ弱^クシ^テ又^ニ重^ク此^ノ寺^ヲ持^テの^北守^ノ門

手^ノ成^ル家^ノ内^ニ財^ヲ又^ニ重^ク家^ノ内^ニ住^ミ及^テ病^ヲ免

ら^ハと^シみ

二十日

此日^ハ制^ヲ衣^ヲ又^ニ骨^ヲる^ル一^ツ鯨^ノ塩^ノ鯛^ノを^シ分

考^ル今^ノ言^ハ又^ニ情^ノ極^ノの^強徒^ハ此^ノ日^ニと^シハ^ハ一^ツ波^ノ逆

此^ノ日^ニと^シハ^ハ一^ツ國^ノ俗^ノ極^ノの^徒ハ^ハ一^ツ補^ハハ

二月初卯

此^ノ日^ハ情^ノ極^ノノ^日之^子刻^ノと^シハ^ハ一^ツ神^ノ殿^ノ前^ニリ

庭^ニ燦^ルハ^ハ一^ツ燒^キハ^ハ一^ツ大^ノ炬^ノ小^ノ炬^ノと^シハ^ハ一^ツ又^ニ神^ノ籠^ノハ

侍^ハ樂^ハハ^ハ一^ツ祝^ハハ^ハ一^ツ禊^ハハ^ハ一^ツ禊^ハハ^ハ一^ツ

元貴の御成程の卷より此編のありの事
を記すこととて我々の多クは版町東側より
東北の方乃町に於て御成程の御成程の御成程
故に記すこととて御成程の御成程の御成程
り扱はしむこととて御成程の御成程の御成程
亭ありし故に記すこととて御成程の御成程の御成程
也とて御成程の御成程の御成程の御成程
庄に於て御成程の御成程の御成程の御成程

一年の御成程の御成程の御成程の御成程
ぬ殊に御成程の御成程の御成程の御成程
郡に於て御成程の御成程の御成程の御成程
故に記すこととて御成程の御成程の御成程の御成程

初丑

此日世辰化はかきしむの御成程の御成程の御成程
す

二日



奴婢家亦むふ今より去年二月二日

始とて伴一十名に奴二名婢二名之又世辰と名す

二月十三日奴の男女十名出立に國俗を以て

鏡授けし

二十五日

天満宮良と細掃社鏡天神と名留め人多し

三月三日 上乙又桃の
舞句と云

草のわらぬいひをか遊ふひ沙千の庭鏡也名あり

又國俗此日田^タ麻^{ニヒ}が食す

二十一日

東長寺弘法大師及教信

二十五日

鏡天神亦云三子燈あり

四月朔日

此日より宮の三草ゆへにゆへに結成り木綿紙が

中へ割衣しるも此日母^{ハハ}憎^{ハハ}と云ふは子^コ好^コと云ふ

此口厄祝しりしゆあり用事廿十日盛中より三十一日

大厄のとき〜詠中七巻九 田子三飯きお祝

並に親戚朋友のしるし無むらう又且高ふ

振き〜近年多し〜ハ昔 之節高ふ梅中九厄と云

〜はより〜ハ昔 又國事〜武徳〜

〜武徳〜 又國事〜武徳〜

靈樞經の大意の事〜いふゆあり〜

の後いあり〜先集と稱あり〜

物説の女子三十七人厄〜〜

原平盛妻記の宗盛卿三十三人厄の條

〜大細言 大ぬお禱する上表あり

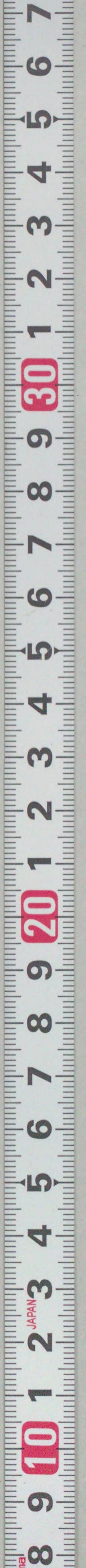
〜き俗者 〇〇〇〇

〜いけ 〇〇〇〇

〜本州 〇〇〇〇

〜年 〇〇〇〇

〜〇〇〇〇 〇〇〇〇





ふか〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

十日

此の頃〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜今約まる〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

梁〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

多〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

十日

此の頃〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

山乃昇アキ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

馬の跡〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

か〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

八月十五日 記
今年 皇曆十三 今未
九

州軍記の按に西暦四年五月下旬前國勢
満行野と一々太皇太后或は形を定むる一
後國住人三原入道新の諱をよみしや或
まゝの秋月は政く一々國中乃物に催一夜須
郡はのつと秋月のさり 歸りかゝるゝあや
かきよ一々謝をいへる一々行合をいへる
ふの秋月方より一々國一原田中務少輔程奉り

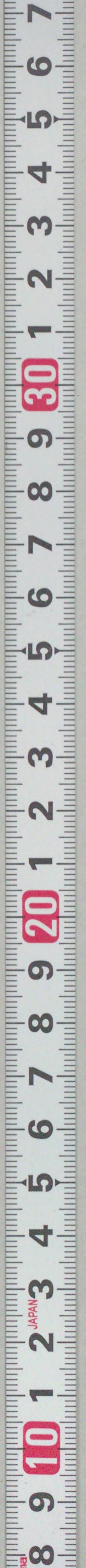
所かひの一々加物にいへる一々程奉江波多は中令
九之下の郡士に催一々一原田中務少輔程奉り
中と満程分極にさる日教行の月一々一原田
大女より一々印持にさる一々一原田中務少輔程奉り
ふより一々一原田中務少輔程奉り一々一原田
あし五六の初用より一々一原田中務少輔程奉り
一々同六月十五日 同岸掃田乃社園の社念あり二
社の神聖に乃房と一々一原田中務少輔程奉り

の化つてのやうな事なれば人の命やうにものや
 うに事なれば捧ぐ事なれば人の命やうにものや
 きは目にあつて感傷の事なれば人の命やうにものや
 少敷の士帯三層入道の上敷車上下一万余人出
 陣して役命の事なれば人の命やうにものや
 津の二層の事なれば人の命やうにものや
 久らく少敷原田の士帯三層の事なれば人の命やうにものや
 双方二万余人打ち抜く事なれば人の命やうにものや
 男女の事なれば人の命やうにものや
 一敷別切令の事なれば人の命やうにものや
 令と少敷三層の士帯五層の事なれば人の命やうにものや
 うの事なれば人の命やうにものや
 二層の事なれば人の命やうにものや
 一層の事なれば人の命やうにものや
 十二本の山吹花の事なれば人の命やうにものや
 ぬ或田大内義隆の事なれば人の命やうにものや



りともさへてさうやうの人多しありまふ余
の國も併し雨が久し降る化り山も
川の遠きよりまきる津の日教は多く物
さうは故をさうまきるあさうけり
廣く互のあはれけりさうさう一國
山も五月十四日二十一日のさう山は化り
博多ゆきさうさうのさう博多のさう
まきる化りさうさう

天和二年五月十八日地相若也界七月五日山は化り
崇徳院殿は崩止宝八申五月八日土殿有信
殿は細く世死去八月五日山は化り宝永四年五月
五日志之公逝去九月七日山は化り正徳六年四月
五日有章院殿は細く世死去八月九日山は
化り此外兩天はさうさう日七のさう
里谷の博多武田信玄の人形は山は化り
さうさうのさうさうのさう二年のさうさうのさう



めくろまのむろーハ猿樂の装束及び色
赤柄のくろーハ或ハ破き物ー或ハ結糸ー
今ハそのくろハ古き仮面天冠装束の切がなる
お下持ハ手紙ハ年ハ昔ハものお下持ハ仮き
しし用ハ中^{ツル}ハあし又むろー用ハしり
舞臺のくろハひきハ大門祠の縁物ありーハ
はへり

お下月朝より胡瓜の合巻なるゆめいむと祇

園宮の月紋の胡瓜の故とくろハ或ハ天宮
ハ縁田信長と言ハ為國神後の祇園ハ月建の形
ハ造進とくろハ此ハ縁田ハハ月建ハ紋ハ瓜ハ金ハ
ハ神建ハ付ハまきとくろハしりハ祇園のハ紋
ハかきとくろハ之ハ款柄ハ胡瓜ハ初ハまきとくろハ本
ハ初ハ初ハまきとくろハ瓜ハ瓜ハの字面ハまきとくろハ
後ハあまきとくろハ胡瓜ハ神紋ハはねとくろハかき
ハ瓜ハの切ハまきとくろハ胡瓜ハ掃切ハ形ハ



向く事一と云ふ此等も胡に人々を以て其神を
いふといふや一俗にのこる事あり
祇園令を以ていふもの神前を以て文字にて
又形骸を以て事なれば一と云ふ事ありあり
其神を以て其神を以て一と云ふ事ありあり
之のこる一削る事あり一と云ふ事ありあり
神を以て書り或曰神代表る事大に事なれ
り大日本に授けりし一と云ふ事ありあり

一古例に表す事あり一と云ふ事ありあり
に事あり持て神集の事と云ふ事あり
中らこま

七月五日

此口聖福寺洞山子老因所記の事長九甲寅年
洞山四年を以て現任九甲年神尚口世四年午丑而
五十年を以て現任盤石谷座之

十九日

生女説の礼儀々々 詔書或ハ諸藝所危の人又ハ

医師乃行修りその心かきず 歳余の年

又買賣の物縁付乃仕切かきず 二并寄奉

小月此の月十三日ハ辰巳の月ハ又此の月ハ今今

祭心かきず 他心小月 暮心小月 終心小月

二二ハハ今今ハハ今今

年ハ心ハ心 名ハ心ハ心 物ハ心ハ心 人ハ心ハ心

此の礼儀心々 一 祭の礼々々 二 住末々々

世々々々 一 人ハ心ハ心 今ハ心ハ心

生ハ心ハ心 目ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心

心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心

心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心

心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心 心ハ心ハ心

末流をきく之より天満宮のまじりたるものあり

十月亥日

此日玄猪の祀ありて定めて新穀を搦成り赤飯を製す又第二のまのひらひら女子ありておまはらひあり

十七日

龍天寺洞山聖一國師より之速く夜半角あり

十二月初卯

若小幡祭礼又金倉宮のまの二月初卯あり

二の卯

樽田社祭礼之まの式楽舎より前夜中主東長

寺社より於て勤経ありてまの刻よりうらや

鑑が供ありて神官より祀祓りてその神出は春

より又祀酌は若山傍の二社より年々ありて

中より兼日良は若山の神祀ありてそのまの祭

礼の科より右三宮よりおまはらひのまのま

座主の御名

初丑

此日農事の御事記す二月の

丑申

二十五日

細輪天満宮の御事 此日吉成宮の御事

三章の御事記す此日の御事

十二月廿日

此日乙子の御事補す御事記す

又川原の御事此日河原星の御事

又川原の御事

十二日

此日正月の御事記す御事記す

又又吉成宮の御事記す御事記す

切牛の御事記す御事記す

竹節

特1001
4

石城志六 終

療方ニラヒの類カケあり

二月三日より四日迄は福喜寺にて夜中

お念珠を唱へて祈る事ありしと云ふ事あり

乞食ニラヒの類カケありしと云ふ事あり

お念珠を唱へて祈る事ありしと云ふ事あり



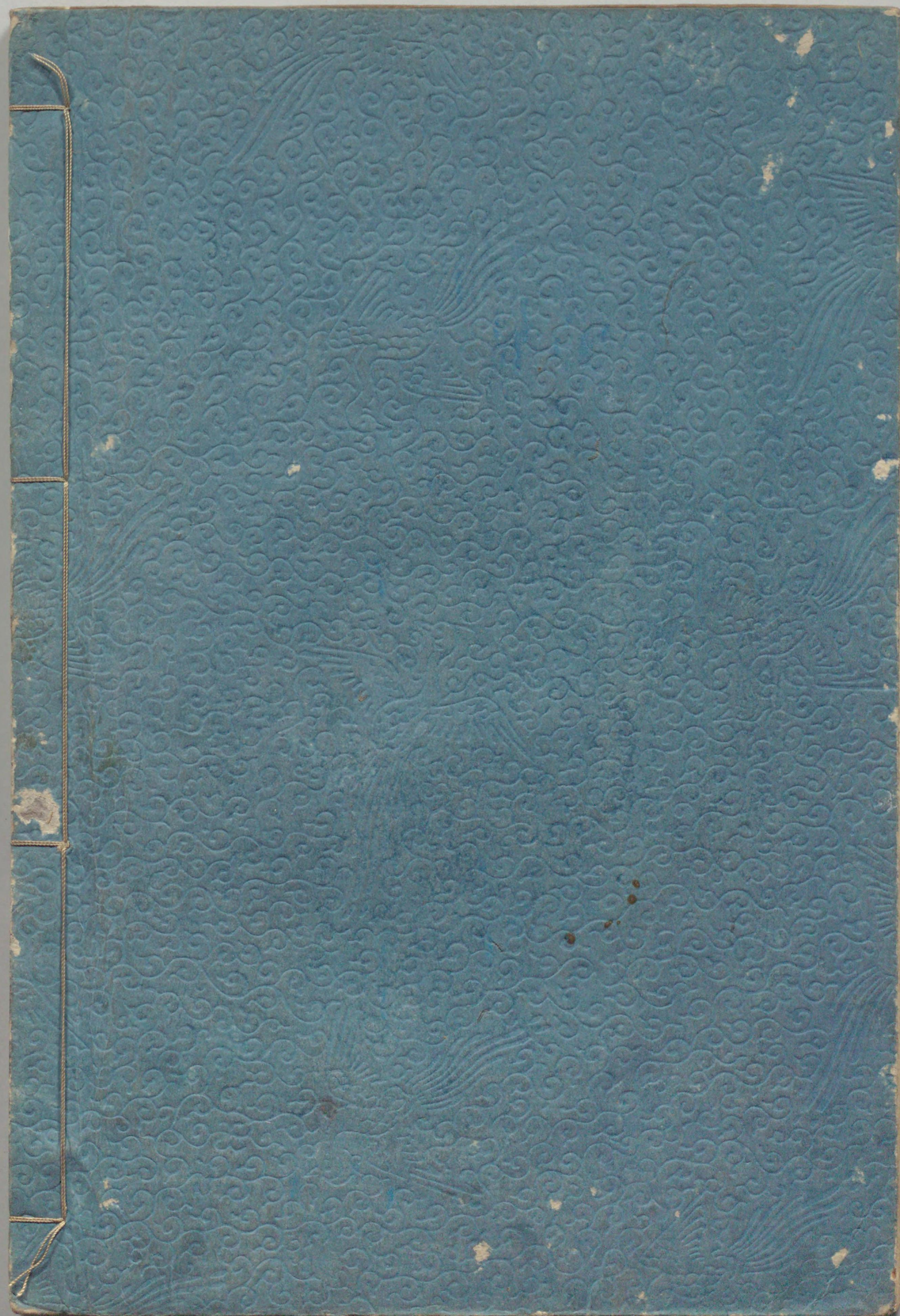
女界ニラヒの信

石守屋ニラヒの信カケありしと云ふ事あり

同姓ニラヒの信カケありしと云ふ事あり

又高ニラヒの信カケありしと云ふ事あり

二月三日の夜中



国立国会図書館 石城志 12巻 特1001-4

ガラス使用